

春のめざめ チョウたちの世界

— 青少年のための自然観察入門 —



awakening of the spring

春のめざめ

小さな虫たちにとって、春はこの上ない命のめざめの時である。暖かく、やさしい春の日差しは、厳しい冬をのりきったものだけに与えられる命への賛美の詩でもある。

野や山に春の草花が咲き始めるころ、チョウたちの目ざめが始まる。モンシロチョウの蛹はキャベツ畑のかきねや小屋のかけで、ギフチョウの蛹は山の岩や地面の枯れ枝で羽化の時を待つ。チョウにとって羽化は、生死に関わる問題である。失敗は許されない。……永遠に空を飛ぶことはできないからである。息をのむ一瞬一瞬、それはまさに命が生まれる感動の連続である。

今、子供たちを取り巻く環境は大きく転換し、都市化や情報化は子供たちの生活を呑み込んでしまった。学校から帰れば塾通い、そしてビデオやゲームの毎日。自然への取り組みはきわめて少なくなった。反面、現われてきた問題は、友だちに対する思いやりや、生きものに対するいたわりの欠如である。自然体験の不足は、生命への共感や尊厳、そして、自然への感謝する気持ちを奪ったとも言えるのである。

「いのちを大切にする」豊かな心を育む教育は、足元の小さな命に目を向けることから始めなければならない。「いのち」を狭義の人間だけの尺度で考えることからは、決して将来、地球規模で自然や人間について考える思想は生まれないのである。

私たちは「チョウ」を通して、自然のすばらしさや在り方について学んでまいりました。幸い、チョウのほとんどがそれぞれ異なった植物を食することで、多くの植物についても学んできました。チョウを学ぶことは、決して昆虫学だけではありません。植物学にも、ひいては地史学にもつながっているのです。

ささやかなこの催しを通して、子供たちに自然のすばらしさや、野外に出ることの勇気を与えることができれば幸いに思います。

目 次

春のめざめ（まえがき）

| | | |
|-----|---------------------|---|
| I | 春の女神 ギフチョウ | 1 |
| II | 国蝶 オオムラサキ | 3 |
| III | 海を渡る アサギマダラ | 5 |
| IV | たくましきチャンピオン モンシロチョウ | 7 |
| V | 幼虫の顔いろいろ クロコノマチョウ | 9 |
| VI | チョウたちの生活 | |

アゲハチョウ科

| | | | | |
|-----|---------|-----|-----------|----|
| (1) | ナミアゲハ | (2) | キアゲハ | 11 |
| (3) | クロアゲハ | (4) | モンキアゲハ | 12 |
| (5) | オナガアゲハ | (6) | アオスジアゲハ | 13 |
| (7) | カラスアゲハ | (8) | ミヤマカラスアゲハ | 14 |
| (9) | ジャコウアゲハ | | | 15 |

シロチョウ科

| | | | | |
|------|-----------|------|--------|----|
| (10) | スジグロシロチョウ | (11) | モンキチョウ | 16 |
| (12) | キチョウ | (13) | ツマキチョウ | 17 |

ジャノメチョウ科

| | | | | |
|------|------------|------|-----------|----|
| (14) | ヒメウラナミジャノメ | (15) | コジャノメ | |
| (16) | ヒメジャノメ | (17) | ヤマキマダラヒカゲ | 18 |

タテハチョウ科

| | | | | |
|------|---------|------|---------|----|
| (18) | キタテハ | (19) | ルリタテハ | 19 |
| (20) | アカタテハ | (21) | ヒメアカタテハ | 20 |
| (22) | ゴマダラチョウ | (23) | コムラサキ | 21 |
| (24) | スミナガシ | (25) | コミスジ | 22 |

シジミチョウ科

| | | | | |
|------|---------|------|---------|----|
| (26) | ベニシジミ | (27) | ヤマトシジミ | 23 |
| (28) | ウラギンシジミ | (29) | ウラクロシジミ | |
| (30) | コツバメ | (31) | ミヤマシジミ | 24 |

セセリチョウ科

| | | | | |
|------|------------|------|---------|----|
| (32) | アオバセセリ | | | 25 |
| (33) | イチモンジセセリ | (34) | キマダラセセリ | |
| (35) | ギンイチモンジセセリ | | | 26 |
| (36) | ダイミョウセセリ | | | 27 |
| (37) | ホソバセセリ | | | 28 |

テングチョウ科

| | | | | |
|------|--------|--|--|----|
| (38) | テングチョウ | | | 28 |
|------|--------|--|--|----|

| | | | | |
|-----|--------|--|--|----|
| VII | 卵のいろいろ | | | 29 |
|-----|--------|--|--|----|

| | | | | |
|------|------------|--|--|----|
| VIII | 食草他、栽培植物一覧 | | | 31 |
|------|------------|--|--|----|

あとがき

メンバー一覧

I 春の女神 ギフチョウ (アゲハチョウ科)



1992年3月28日12時35分、ギフチョウのめざめ



蛹

ギフチョウの羽化が始まる。
地面すれすれの蛹から出ると,
すばやく近くの岩や木に登る。
縮めていた翅を
のばさなければならないからだ。
一刻の猶予もない。
失敗すれば,
永遠に空を飛ぶことはできない。

春は、大地からわき上がる。
山にスミレやカタクリが咲くとき,
ギフチョウが生まれる。
おだやかな春の日差しを受けて,
ギフチョウが舞い立つ。
6月から3月までの長い9か月間の
夏の厳しい暑さや冬の凍りつく寒さを
乗り切ったものだけが,
この花の甘い蜜を味わうことが
できるのだ。



ドウダンツツジで吸蜜



交尾

交尾後、数日たつと、メスは産卵する食草（ヒメカンアオイ）のまわりを飛び回る。母蝶として、幼虫のために開きかけた新鮮な葉を選ぶのだ。前脚をたたくようにして慎重に葉を確かめる。

前脚を葉の縁にかけ、腹を曲げ、空を見つめる。

一つ、真珠のような輝く卵が生まれ出た。さらに二つ、三つ、尾端で葉の様子を確かめながら、産み続ける。



集団で暮らす若い幼虫

ギフチョウの一日が始まる。

朝、まず翅を乾かし、体を温める。

陽が、やや高くなる頃から活発に飛び回りスミレやキランソウ、

ドウダンツツジなどでさかんに吸蜜する。

そして、オスは梢の上を飛び回り、

メスを求める。

交尾はおよそ1時間。

終わる間際、オスは腹部をさかんに動かす。

これは、メスの交尾口をふさぐためである。交尾の終わったメスに板状の交尾付属物が付けられる。

もうメスは、二度と交尾することはない。

確かに、卵に命がふきこまれたのだ。



産卵

卵からかえった幼虫は、兄弟いっしょに身を寄せあって生きていく。えさを食べるのも驚いて体を曲げるのもいっしょである。

しかし、3歳から4歳に大きく成長するとそれぞれ林の中へ散らばっていく。武器の少ないこの幼虫が、たくさん敵に耐えて蛹の姿にまでたどりつくのは果たしてどれほどであろうか。

《食草》ウマノスズクサ科のヒメカンアオイ・タマノカンアオイ他

II 国蝶 オオムラサキ

(タテハチョウ科)

佐久間町の大千瀬川と水窪川が合流する赤い大井橋に、山の高さほどの川霧がかかる。その霧をくぐり抜けるとオオムラサキの世界である。川のほとりのエノキにオオムラサキが暮らしている。7月の下旬、ヤナギの樹液に集まるオオムラサキに出会った。翔ぶ姿はまさに鳥、紺碧の地肌に黄色と白の斑紋を散りばめた翅は澄みきった佐久間の山々に輝いた。

日本の国蝶オオムラサキ。タテハチョウの仲間で一番の大型。紫色の美しさは世界のタテハチョウ科を代表するチョウである。冬、4令幼虫でエノキの根元の落ち葉について冬を越す。秋の終わり、エノキの葉が落ちる頃、樹を下って地面に下り、体も落ち葉の色に変身するのである。それから5ヶ月余り、凍りつく寒さの中でひたすら春が来るのを待ち続けるのである。



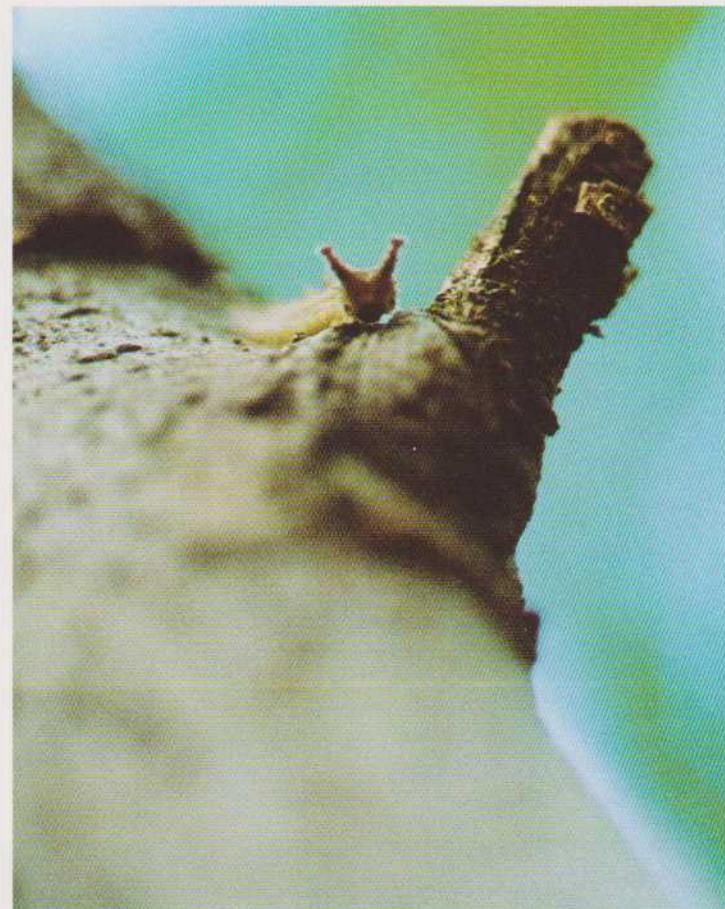
羽化したばかりの成虫



霧の向こうはオオムラサキの世界だ

グライダーに似たオオムラサキの飛翔を横吹の村で見つけた。横吹は水窪へ通じる斜面の村である。歩くにも難儀する程の斜面に村があることなど想像できなかった。しかし、この村こそ、オオムラサキの里であった。

どの家も風よけのエノキに支えられていた。200年以上もたったエノキの根元に細々とオオムラサキの幼虫がいた。昔、ききんの時、村ではエノキの葉を食べたという。そのころオオムラサキは横吹の村を乱舞したにちがいない。



秋の終わり幼虫はエノキを下る



力強い角はチョウの王様にふさわしい

今、残された家はわずかである。ほとんどが不便な家を捨てたのだ。荒れた廃墟のエノキにはオオムラサキはいなかった。

植林はますます進む。役に立たないエノキはもう、川のほとりの崖っぷちにしかない。横吹の村の古い家もなくなろうとしている。オオムラサキの飛ぶ、貧しくも美しかった日本はもう消えてしまうのであろうか。

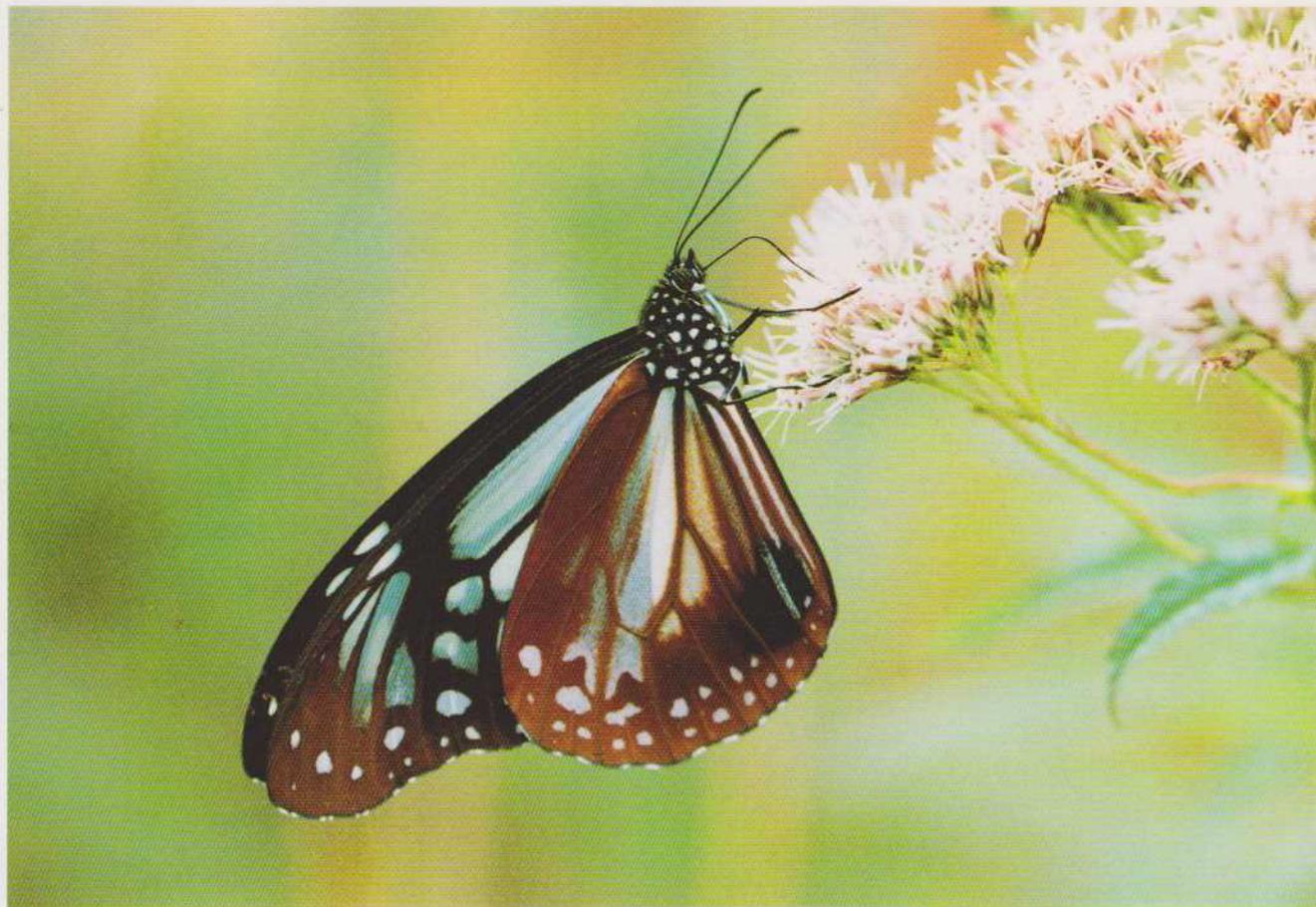
《食草》ニレ科のエノキ・
エゾエノキ他

III 海を渡る アサギマダラ

(マダラチョウ科)

秋も深まりゆく10月。西風の吹きつける伊良湖岬を何百頭ものアサギマダラが飛びたつ。アサギマダラは海を渡るのだ。向かうその先には、紀伊半島があり、四国があり、九州、そしてはるかに沖縄がある。アサギマダラはどこまで行くのであろうか。また、何のために旅をするのであろうか。うすいアサギ色のしなやかなこの翅に長い間ちかわれてきた秘密があるに違いない。

毎年10月10日、富幕山に登る。北の山々から渡ってきたアサギマダラが、旅の途中、ひと休みするところだ。アザミやヒヨドリバナにゅったりと止まり、蜜を吸う。驚いて飛びたった時の美しさ、半透明の翅に青い空が映りアサギ色の斑紋がゆれる。しばらくして、1頭ずつなめらかに山を下っていく。西には湖西連峰が伊良湖まで続き、南には浜名湖のむこうに遠州灘が広がる。



旅のひと時、ヒヨドリバナで吸蜜するアサギマダラ

アサギマダラが通った後、食草のキジョランに卵が残される。温度が低いため、10日以上もたってやっと1令幼虫が生まれる。生まれた幼虫は、まず卵のからを食べ、次に自分の巣を作る。からだを回しながら葉をかじる。かじった葉から白い乳液がこぼれる。乳液は円の形となり、小さな幼虫をとり囲む。何という知恵であろうか。この乳液こそアリやダニから身を守る武器なのである。いやそればかりではない。乳液をぬいた葉こそ大切な食料でもある。幼い幼虫にとってキジョランはあまりに毒性が強すぎるるのである。



小さな幼虫の生きる知恵



蛹になる日も近い

冬の暖かい日、幼虫はキジョランを少しづつ食べ大きくなっていく。そして春もたけなわの頃、蛹となるのである。マダラチョウ科特有の丸い形をした蛹の美しさはたとえようもない。金色や水色の斑紋が光る。この蛹こそアサギマダラが大昔、熱帯から渡ってきた証拠なのである。

10年前、アサギマダラを追って紀伊半島を越え、和歌山の友が島についた。友が島は潮の流れの速い海峡にある。翅の傷ついたアサギマダラが時おり海を渡っていった。

ぼろぼろになっても、ひたすら飛び続けるアサギマダラ。激しい波は見る間にアサギマダラをかき消していく。しかし、彼らの行く方向は四国の島に思えてならなかつた。

《食草》ガガイモ科のキジョラン・オオカモメヅル他



美しい蛹が大昔の故郷をものがたる

IV たくましきチャンピオン モンシロチョウ (シロチョウ科)

菜の花に集まるモンシロチョウ。モンシロチョウこそ、わたしたちの最も身近な、春を告げるチョウなのである。畑は住宅地に変わり、いよいよモンシロチョウの棲み家は減ってきた。たとえ残されたキャベツ畑でも次の日には耕され、消えてしまう。さらに、天敵のハチにおそれ、鳥にもねらわれる。

だが、毎年、モンシロチョウの飛ばない春はない。きっと、たくましく生き続ける秘密があるに違いない。

夏の終わり、中田島の海岸に行った。海の見える道ばたの雑草にモンシロチョウが卵を産んでいた。その草は、外国から渡ってきた植物、マメゲンバイナズナであった。



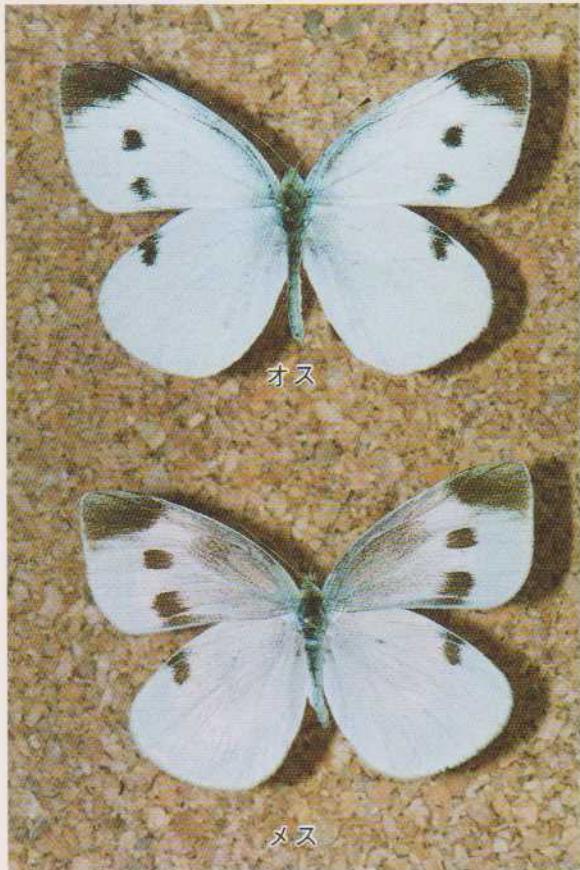
キャベツ畑のとなりのサトイモの葉で雨宿り



セイヨウフウチョウソウを食べる幼虫



幼虫の体を食いやぶって出てきた
アオムシコマユバチがまゆをつくる

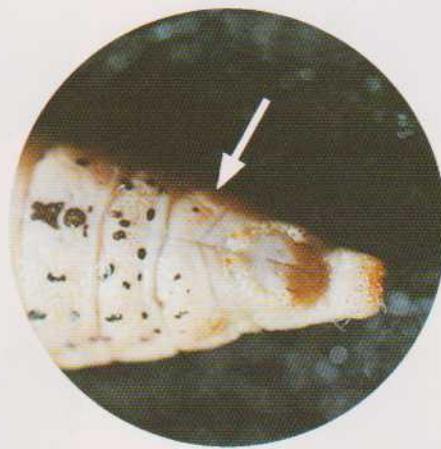


オスと比べるとメスの翅の表にはやや光沢がある。人間の目にはこのわずかな違いも、彼らにとっては全く別の色に見えているのかもしれない。メスや好きな花に近付く速さは、実に驚異的なのである。

昔、葉も無い小さな草にモンシロチョウが産卵しているのを見つけた。こんな雑草になぜ産んだのであろう。不思議に思って持ち帰って調べてみた。何とやはり、アブラナ科のカキネガラシであった。ほとんど図鑑にも載っていないこの帰化植物をどうして知っていたのだろう。小さなモンシロチョウの生きる知恵は、はかり知れない。

蛹には2つの色の違うものがあるが、オスとメスではない。キャベツ畠から20mも移動して家の軒下、ブロック塀などにつけたものは、灰色を帯びた褐色である。キャベツの葉の付け根近くについたものは、黄緑色である。まわりの色に合わせて、少しでも身を守ろうとしている。

腹部第8節をルーペで見てみよう。縦に細い線があるものとないものがある。どちらがメスだろうか。



蛹の色、いろいろ

V 幼虫の顔いろいろ クロコノマチョウ (ジャノメチョウ科)

雨上がりの林道で、ススキの葉の裏にとまっている幼虫が目に入った。美しい緑色の体、角に似た生意気な突起、クロコノマチョウの幼虫だ。

しばらく歩いていくと、同じようにススキにとまっている幼虫を見つけた。

なぜだろう。顔の模様がみな違う。こんなに違うチョウの幼虫は他にない。この模様の違いは、何を表すものなのだろうか。



幼虫の顔

夕暮れの林で、なわばりを守るオス



変態する様子

1週間後、蛹になる準備が始まった。かれらは、ススキの葉の裏に、逆さになり、体を丸めて一昼夜じっとして動かない。

さかさまのまま、腹をふくらめたり、頭を上げたり、下げたりすると、表皮が背中から割れ始めた。透明感のある、みずみずしい緑色の蛹が姿を現した。



前蛹



蛹

蛹の背中が割れ、頭が出たかと思うとあっという間に、からだ全体が飛び出した。すぐに上向きに位置を変える。

たたまれていた翅が少しづつひらいていく。赤い柿色の紋が見えてきた。羽化の成功である。残念ながら、期待に反して、どの顔の幼虫もクロコノマチョウそのものであった。

夕方、林の中から、ふっと現れるクロコノマチョウ。夜行性の目をもったこのチョウには、まだまだ神秘的な過去があるようと思えてくる。

最後に、今脱いだ幼虫の皮を落とそうと激しく体を振る。幼虫の表皮に変化が表れてから、3時間のドラマは終わった。

エメラルドグリーンの蛹が輝く。

蛹になって13日目、蛹のからとチョウの体との間に、すきまが見え始めてきた。羽化は近い。



羽化

IV チョウたちの生活

チョウの種類によって生活は様々である。食草も違えば、幼虫の形や色も違う。それはまさに、それぞれの生きてきた歴史の違いもある。しかし、今、生きているチョウに共通したものがある。いかなる地球の変化にも決して滅びなかった“生きる知恵”である。チョウとの出会いは美しいという感激だけではなく、その“生きる知恵”との出会いでもある。

アゲハチョウ科

(1) ナミアゲハ



産卵

庭のキンカンの木に毎年ナミアゲハが産卵する。実を食べたい母は消毒をくり返す。そしてチョウを見たい私といつも黙って反目する。しかしいつも若い新芽は幼虫でうまる。私が勝ったのではなく、ナミアゲハが勝ったのである。

《食草》ミカン科のキハダ・サンショウ他



蛹

(2) キアゲハ

《食草》セリ科のセリ・パセリ・ニンジン・シシウド他

南アルプスの2000mの山でキアゲハと会った。浜松の休耕田で見た同じチョウだとは想像もできない。日本海がまだ湖だった頃シベリアの方から渡ってきたという。

地球の長い歴史を思わせる。



幼虫



冬越しの蛹



交尾

(3) クロアゲハ 阿多古川で吸水するクロアゲハを見た。尾端からピッピッと水をとばしている。後翅の赤い模様が砂の光で炎のように輝いた。ミカンの花で吸蜜し、ミカンの木に産卵する。ミカンが日本に来る前、一体どこにいたチョウであろう。《食草》ミカン科のカラタチ・サンショウ他



冬越しの蛹



成虫

(4) モンキアゲハ 慇ヶ峰に出かけた。夕暮れになり、歩き疲れて座っていた。遠くから何か人だまのようなものが2つ揺れながらぐんぐん近づいてきた。まさか、モンキアゲハの白い紋であった。昔の人がチョウを恐れた気持ちがわかる。《食草》ミカン科のキハダ・カラスザンショウ他



カラスザンショウの葉先にいる幼虫



ヒオウギで吸蜜

(5) オナガアゲハ 谷川に足を入れて体を冷やしていると、静かにオナガアゲハが横切っていった。コクサギの生える谷が彼らのすみかである。野性のミカン科を食草とするこのチョウは庭のミカンの葉を食べようとはしない。クロアゲハなどとは故郷が違うのであろう。

《食草》ミカン科のコクサギ・カラタチ他



コクサギで育つ幼虫



コウゾリナで吸蜜

(6) アオスジアゲハ

クスノキの上を稻妻のようにかけ抜けるアオスジアゲハ。今も北の国へ勢力をのばしているという。ステンドグラスのような青い帯は他のチョウにはない。この色こそ熱帯の色である。

《食草》クスノキ科のクスノキ・タブノキ他



交尾



クスノキの葉裏で冬を越す蛹

(7) カラスアゲハ

去年の夏、クサギに集まったカラスアゲハに出会った。きらっと光ったブルーの輝きは今も目からはなれない。カラスは決してただの黒ではない。昔この名前を付けた人は誰であったのであろう。その確かな目に驚く。

《食草》ミカン科のコクサギ・
カラスザンショウ他



ツワブキについた冬越しの蛹



吸水

(8) ミヤマカラスアゲハ

佐久間を越え、水窪を通りぬけ、はるばる戸中山までやってきた。山道を流れる清水に群がるミヤマカラス。ふるえる手で思いっきりシャッターをきりまくった。何という美しさであろう。何本撮ったか覚えていない。

《食草》ミカン科のキハダ・カラスザンショウ他



前蛹



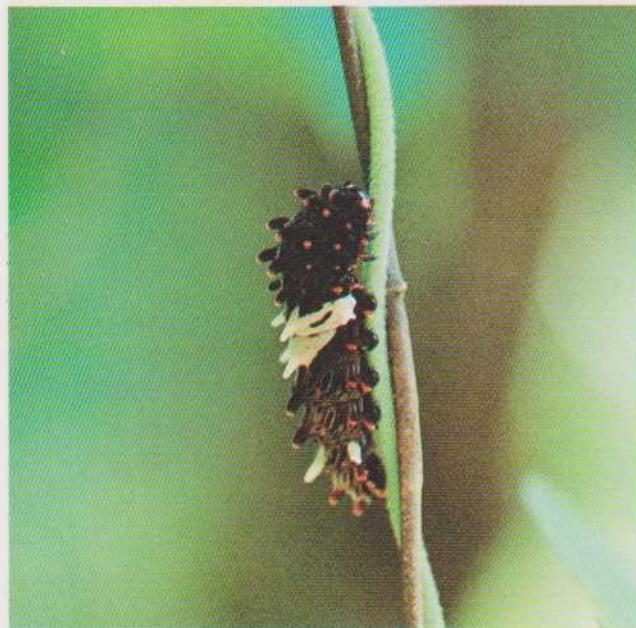
集団で吸水



羽化

(9) ジャコウアゲハ 食草のウマノスズクサ、オオバウマノスズクサは、独特のにおいがある。これが、このチョウを鳥から守っているのだ。また、蛹は、番町皿屋敷の主人公お菊さんが後ろ手に縛られた姿に似ているので「オキクムシ」と呼ばれている。しかし、これをチョウの蛹に見たてる人はほとんどいない。まさに、どこから見ても一級品の彫刻である。自然の限りない深さを感じる。

《食草》ウマノスズクサ科のウマノスズクサ・オオバウマノスズクサ他



幼虫



冬越しの蛹



ノアザミで吸蜜



産卵

シロチョウ科

(10) スジグロシロチョウ

阿多古の村でモンシロチョウに追われるスジグロシロチョウを見た。おだやかに見えるチョウの世界にも、声なき闘いがあるのかもしれない。

《食草》アブラナ科のイスガラシ・タネツケバナ・スカシタゴボウ他



幼虫



カキドオシで吸蜜

(11) モンキチョウ

山の中に家をつくり、クローバーを庭に植えたら、モンキチョウが舞いだした。自然が変わると栄えるチョウがいる。

《食草》マメ科のシロツメクサ・コマツナギ他



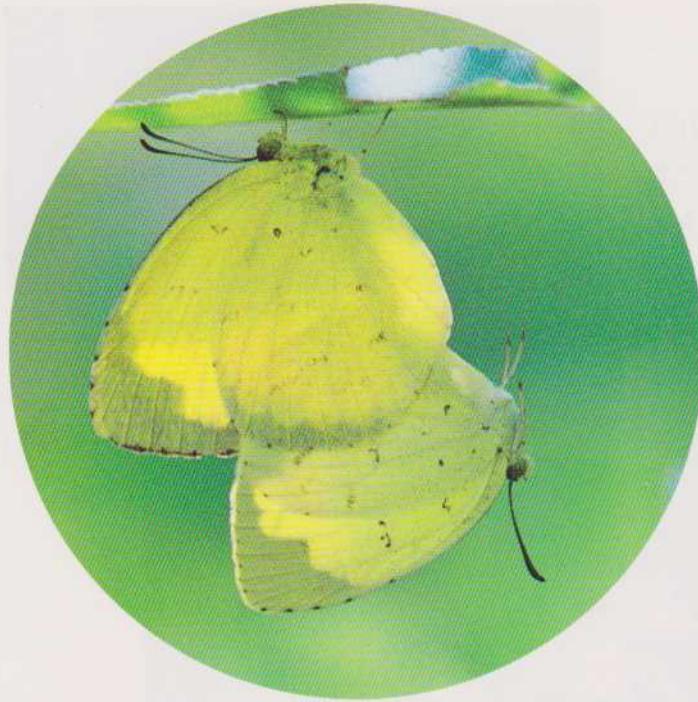
ノアザミで吸蜜



シロツメクサの花を食べる幼虫



蛹



交尾

《食草》マメ科のメドハギ・ネムノキ他

(12) キチョウ

引佐の山道でキチョウと会った。まるで湖に並んだ黄色い帆を連想させるキチョウ。真新しい翅から、成虫で冬をのりきったものだとはとても想像できない。



産卵は一瞬だ（メドハギ）

(13) ツマキチョウ

熊の六郎沢で会ったスプリング・エフェメラル。春わずかなひとときだけに、その可憐な姿を見せるツマキチョウ。3週間ほどたって、また会いに行った。姿はどこにも見当らない。道端の雑草（タネツケバナ）に白い卵を残していた。

《食草》アブラナ科のヤマハタザオ・ハタザオ・タネツケバナ他



タネツケバナに産卵するメス



キツネノボタンで吸蜜するオス



タネツケバナの花を食べる幼虫

ジャノメチョウ科

(14) ヒメウラナミジャノメ

浜北の天竜川の土手に毎年決まって現われる。草を刈り取られても焼かれても毎年姿を見せる。どんなに人間に痛めつけられても必死に生きる彼らの叫びが、かすかに聞こえてくるようだ。

《食草》イネ科のチヂミザサ・ススキ他



鶴ヶ池のほとりで交尾

(16) ヒメジャノメ

阿多古川上流の石神でヒメジャノメに会った。小雨の中を濡れながら飛んでいく。

蛇の目傘を連想するのも、まんざら的外れではない。湿気に強いチョウである。

《食草》イネ科のチヂミザサ・ススキ他



クリの樹液にきた成虫

(15) コジャノメ

天竜川にかなり長い期間現われるチョウである。ジャノメというから“蛇の目”の紋である。人間はあまり恐がらないが、恐がる敵がいるはずである。この模様の敵は一体何であろうか。こんな簡単なこともよく分かっていないのである。

《食草》イネ科のススキ・チヂミザサ他



下草にとまる成虫

(17) ヤマキマダラヒカゲ

秋葉神社の下社の村で樹液にきたヤマキマダラを見た。ヒメキマダラとは住み分けするという。人間には見えない生きものたちの地図が、至る所にはりめぐらされているのだ。

《食草》イネ科のクマザサ他



周りを警戒する成虫

タテハチョウ科

- (18) キタテハ 幼虫は、カナムグラの葉を折り曲げて巣をつくる。大きくなると大きい葉に巣をかえる。中をそっとのぞいてみた。やわらかくて、ふんわりして、ゆりかごのような巣であった。
《食草》クワ科のカナムグラ・アサ



とげを身に付けている幼虫



雨上がり、さっそく飛び出てきた成虫

- (19) ルリタテハ 空き地や路上で、なわばりを主張するような飛び方をする。相手が人間であっても、決してパトロールをかかさない。まさに森の番人である。
とげだらけの幼虫からは、このルリ色のチョウを想像もできない。
《食草》ユリ科のサルトリイバラ・ホトトギス・ヤマホトトギス他



サルトリイバラを食べる幼虫



樹液を吸う冬越しの成虫

- (20) アカタテハ 食草であるカラムシやヤブマオの葉が丸くなっていたら、そっと中をのぞいてみよう。このチョウの幼虫か蛹がいることが多い。成虫のはねの裏は、大変に複雑な色と模様で、美を感じさせる。

《食草》イラクサ科のカラムシ・コアカソ他



食草の葉裏についている蛹



スーパー林道脇のウツギで吸蜜する成虫

- (21) ヒメアカタテハ オーストラリア、ニュージーランド以外、世界中で見られるチョウである。また、集団で渡りをすることもあるという。アカタテハと比べてはねの色がうすく、優しい感じがする。天竜川の土手でヨモギにいる幼虫を見つけた。

《食草》キク科のハハコグサ・ヨモギ・ゴボウ他



複雑な模様の翅の成虫



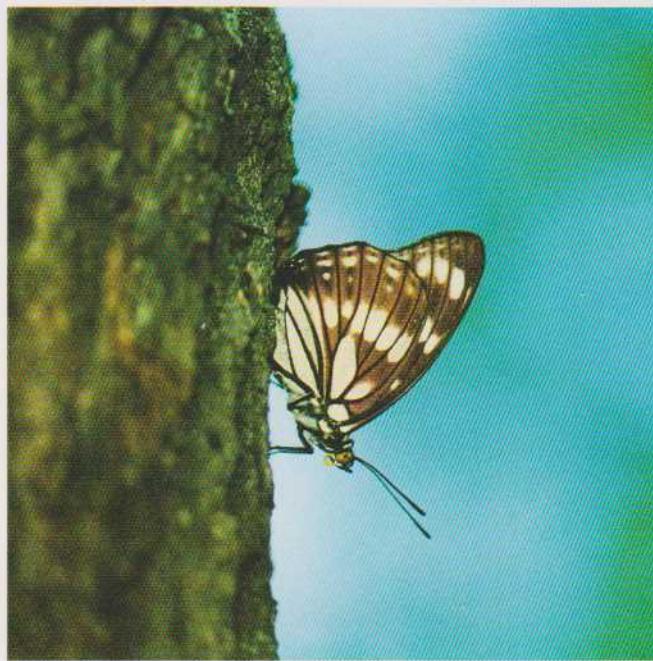
トンボに捕食された成虫

(22) ゴマダラチョウ 食草エノキを同じくするオオムラサキとは、幼虫の背中の突起の数で区別できる。オオムラサキは、どんどん減っていくが、ゴマダラチョウは浜松城公園でも見ることができる。強く生きるチョウに会うと、何かほっとする。

《食草》ニレ科のエノキ・エゾエノキ他



冬眠から覚め、幹を登る越冬幼虫



木の幹で樹液を探す成虫

(23) コムラサキ オオムラサキより小型のため、この名がある。幼虫の背中の突起の数は、ゴマダラチョウより少なく1対である。食草のヤナギ科の樹皮の裂け目に入り、冬越しする。その知恵は見事である。天竜川のヤナギが赤く芽吹く頃、コムラサキはめざめる。天竜川こそ、日本一のコムラサキの宝庫なのである。

《食草》ヤナギ科のカワヤナギ・ウンリュウヤナギ他



ヤナギで冬越しする幼虫



ごみの増えた天竜川原で吸水

(24) スミナガシ 翅が、昔、宮中などで行われた遊びの一種「墨流し」の模様に似ている。滝沢で樹液に来たスミナガシを見た。その翅には清楚で美しい日本的な美がある。

卵からかえった幼虫は、葉の先を食い切り、脈だけ残し、その先にとまる。まさか、葉先が幼虫だとは思いもよらない。大きくなると、頭より大きい2本の角が出る。その姿は、まさにドラゴン。魅力がいっぱいのチョウである。《食草》アワブキ科のアワブキ・ヤマビワ他



葉の中脈にとまる2齢幼虫



枯れ葉のような蛹



カブトムシと樹液を吸う成虫

(25) コミスジ はねを広げると黒地に白色の3本線、グライダーのように飛ぶ姿をよく見かける。時々、人の足元や肩にもとまる。人なつこいチョウである。しかし、幼虫は、食草の葉でカーテンをつくり、めったに見ることはできない。《食草》マメ科のフジ・ヤマハギ・クズ他



クズの茎についた蛹



阿多古の田んぼで吸水する成虫

シジミチョウ科

- (26) ベニシジミ スイバの赤くそまったくロゼットで幼虫を見つけた。びんに入れて飼っていたら、2月の下旬、チョウになった。今、外に出したら仲間がいない。悪いことをしてしまった。今も台所の流しのところで春を待っている。
《食草》タデ科のスイバ・ギシギシ他



スイバを食べる幼虫



あざやかな紅色の成虫

- (27) ヤマトシジミ 石垣の割れ目のカタバミに幼虫がいた。寒さで葉が閉じるとその中に隠れる。もともと、寒さに弱いチョウかもしれない。春、小さな花を飛び回るまでに、何と厳しい試練があることか。
《食草》カタバミ科のカタバミ



カタバミから落ちそうな終齢幼虫



羽化したばかりの成虫

(28) ウラギンシジミ

翅を閉じると銀色の三角形。

表はオスは赤色、メスは青味を帯びた白色である。北杜夫の「幽霊」にこのチョウの様子が的確にえがかれている。

戸中山で、歩き疲れて腰を下ろしていたら、このチョウが首筋にとまり、汗を吸っていた。《食草》マメ科のケズ・フジ他



小川の枯れ木で吸水するウラクロシジミ

(30) コツバメ

早春のやわらかな光を体いっぱいに浴びようと翅の向きをかえていた大変小さなチョウで、飛んでいる姿は目に入らない。かわなの山でアセビの花にくっつくように吸蜜していた。長い冬越しのあとの蜜はさぞかしあいしいだろう。

《食草》スイカズラ科のガマズミ・ツツジ科のアセビ他



天竜川原で生きるミヤマシジミ



ウラギンシジミのオス

(29) ウラクロシジミ

オスの翅の表の銀白色に対して裏は暗いので、この名がある。

暮れゆく引佐の山で、まるで白い妖精のように舞い続ける集団を見た。

《食草》マンサク科のマンサク他



春の日差しを直角に受けるコツバメ

(31) ミヤマシジミ

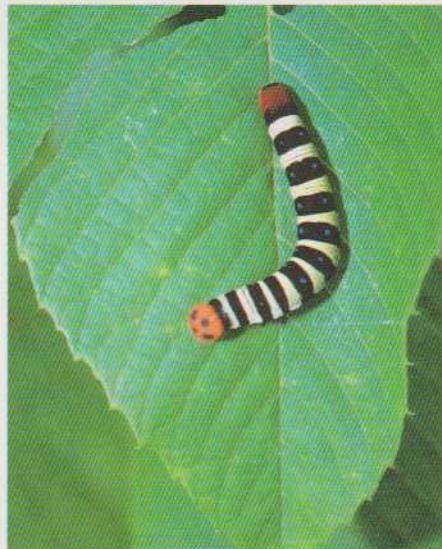
「深山」とついているが、天竜川原でも見ることができる。食草のコマツナギの群落がすみ家である。卵で冬越しするが、11月下旬までには卵の中で幼虫の体がつくられると言われている。

《食草》マメ科のコマツナギ

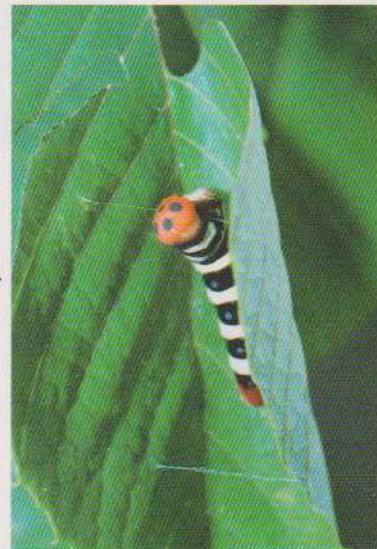
セセリチョウ科

(32) アオバセセリ スミナガシと同じアワブキを食草としている。水窪町では1本の木で両方の幼虫を発見したことがある。いかにも南方系という感じのこの幼虫は、大きくなると葉に切れ込みを入れ、巧みに糸を使って筒状の巣をつくる。だれに教えられた知恵でもない。厳しい自然を生きぬいていくすごさを感じる。《食草》アワブキ科のアワブキ・ヤマビワ他

巣をつくる幼虫



葉を食べながら切れ込みを入れる



糸をかける所も的確だ



完成まであと少し



ネギの花で吸蜜

(33) イチモンジセセリ

昔、「水田の害虫」として嫌われた。しかし、身近なチョウなので、「ちびどり」の愛称もある。花から花へと飛び回る様子は、この名にぴったりだ。
《食草》イネ科のススキ・オヒシバ他



キキョウの花びらの上で一休み

(34) キマダラセセリ

幼虫は、食草の葉で筒状の巣をつくる。この巣の中で冬越しをする。花にとまると、前翅と後ろ翅を直角にし、ジェット機のようなポーズをとる。
《食草》イネ科のススキ・エノコログサ他



ヒヨドリバナで吸蜜する成虫

(35) ギンイチモンジセセリ

後ろ翅の裏、銀色の線が印象的である。飛び方は、弱々しく、お世辞にも上手とは言えない。しかし、天竜川から馬込川へと移動し、さらに小川に沿って分布している。
《食草》イネ科のススキ・チガヤ・アブラススキ他



ススキの葉の上の幼虫



羽化直前の蛹



枯れ葉の上で一休み

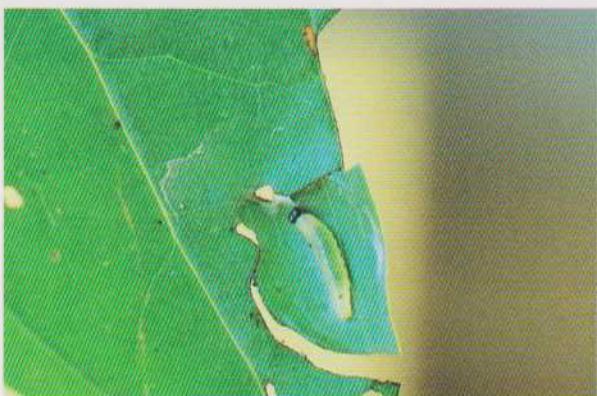


クモに捕獲された成虫

(36) ダイミョウセセリ

「大名」とは、翅の様子が侍が着た紋付きに似ているからである。後ろ翅の表に白色の帯のあるのが「関西型」，これを欠く「関東型」の二つに分けられる。卵は、母蝶がこすりつけた腹毛でおおわれている。また、幼虫は葉の一部に切れ込みを入れて折り返し、ふたのような形で巣にする。身を隠しているようだが、かえって目立っていることを知っているのだろうか。

《食草》ヤマノイモ科のヤマノイモ・オニドコロ他



巣のふたをあけたら驚いた幼虫



複雑な模様をもつ蛹



交尾

(37) ホソバセセリ

食草であるススキやチガヤの1枚の葉を筒状にした巣の両端には食べ跡がある。これほどかんたんで、合理的な家は、ほかにない。

羽化したばかりのチョウに出会った。セセリチョウというと、ガと間違えられるが、落ち着いた色合いの翅が美しい。

《食草》イネ科のススキ他



羽化したばかりの成虫

テングチョウ科

(38) テングチョウ

1月の始め、三ヶ日町の山道を歩いていた。道が大きく曲がり、風がない日だまりにさしかかり冬越しの成虫に会える予感がした。

やっぱり、1頭のテングチョウが、太陽のふりそぞぐホオノキの落ち葉にとまっていた。えさもほとんどないこの冬の山で、どのようにして生きていくのであろう。

《食草》ニレ科のエノキ・エゾエノキ他



ホオノキの葉裏で日光浴

VII 卵のいろいろ

生命の始まりである卵は、ふ化するまでに短いものでは2日、卵で越冬するようなミドリシジミでは8か月近くに達するものもある。身を守るために工夫が、それぞれの種によって形に表れている。さらに「科」ごとに似ている点、同じ科の中でも、さらに仲間分けができる。野外で食草となる植物を見かけたら、探してみよう。以下の写真では拡大されているが、実際の卵の大きさは、1mm前後である。

アゲハチョウ科



アオスジアゲハ



ウスバシロチョウ



ギフチョウ



ジャコウアゲハ



ナミアゲハ

カラスアゲハ
ミヤマカラスアゲハ
モンキアゲハ
オナガアゲハ
クロアゲハ（縦の細い線）

シロチョウ科



ヒメシロチョウ



モンキチョウ



モンシロチョウ



スジグロシロチョウ

ジャノメチョウ科



クロコノマチョウ



コジャノメ



ツマジロウラジャノメ

タテハチョウ科



アカタテハ



ルリタテハ



オオムラサキ



ミドリヒヨウモン

セセリチョウ科



コミスジ



ギンイチモンジセセリ



ダイミョウセセリ

シジミチョウ科



ウラギンシジミ



ウラゴマダラシジミ



ベニシジミ



ヤマトシジミ



ミドリシジミ

「チョウの卵」と言っても
ずいぶんいろいろある。それ
ぞれの特徴を言葉で説明して
みよう。

VIII 食草他,栽培植物一覧 (1993年3月現在, 栽培しているもの)

| 種名 | 科名 | 食草とする蝶 |
|---------------|----------|---------------------|
| 1 イヌガラシ | アブラナ科 | モンシロチョウ スジグロシロチョウ |
| 2 カキネガラシ | アブラナ科 | モンシロチョウ スジグロシロチョウ |
| 3 キャベツ | アブラナ科 | モンシロチョウ |
| 4 スカシタゴボウ | アブラナ科 | モンシロチョウ スジグロシロチョウ |
| 5 ダイコン | アブラナ科 | モンシロチョウ |
| 6 タネツケバナ | アブラナ科 | ツマキチョウ |
| 7 ナズナ | アブラナ科 | モンシロチョウ スジグロシロチョウ |
| 8 ハタザオ | アブラナ科 | モンシロチョウ スジグロシロチョウ |
| 9 マメグンバイナズナ | アブラナ科 | モンシロチョウ |
| 10 アワブキ | アワブキ科 | スミナガシ アオバセセリ |
| 11 ススキ | イネ科 | クロコノマチョウ ギンイチモンジセセリ |
| 12 ウスバサイシン | ウマノスズクサ科 | ヒメギフチョウ |
| 13 オオバウマノスズクサ | ウマノスズクサ科 | ジャコウアゲハ |
| 14 オナガカンアオイ | ウマノスズクサ科 | |
| 15 コシノカンアオイ | ウマノスズクサ科 | ギフチョウ |
| 16 タマノカンアオイ | ウマノスズクサ科 | ギフチョウ ヒメギフチョウ |
| 17 ヒメカンアオイ | ウマノスズクサ科 | ギフチョウ |
| 18 ミヤコアオイ | ウマノスズクサ科 | ギフチョウ |
| 19 オオバコ | オオバコ科 | |
| 20 キジョラン | ガガイモ科 | アサギマダラ |
| 21 カタバミ | カタバミ科 | ヤマトシジミ |
| 22 ハンノキ | カバノキ科 | ミドリシジミ |
| 23 オニタビラコ | キク科 | |
| 24 ジシバリ | キク科 | |
| 25 セイヨウタンポポ | キク科 | |
| 26 ツワブキ | キク科 | |
| 27 ノボロギク | キク科 | |
| 28 ハルジオン | キク科 | |
| 29 ヨモギ | キク科 | ヒメアカタテハ |
| 30 キブシ | キブシ科 | |
| 31 クスノキ | クスノキ科 | アオスジアゲハ |
| 32 シロダモ | クスノキ科 | アオスジアゲハ |
| 33 タブノキ | クスノキ科 | アオスジアゲハ |
| 34 ニッケイ | クスノキ科 | アオスジアゲハ |
| 35 オニグルミ | クルミ科 | オナガシジミ |
| 36 クロウメモドキ | クロウメモドキ科 | トラフシジミ |
| 37 カナムグラ | クワ科 | キタテハ |
| 38 ジロボウエンゴサク | ケシ科 | ウスバシロチョウ |
| 39 ムラサキケマン | ケシ科 | ウスバシロチョウ |
| 40 カキドオシ | シソ科 | |
| 41 キランソウ | シソ科 | |
| 42 コショウノキ | ジンチョウゲ科 | |
| 43 スイカズラ | スイカズラ科 | イチモンジチョウ |
| 44 スミレ | スミレ科 | ミドリヒョウモン他 |
| 45 ウイキョウ | セリ科 | キアゲハ |
| 46 セリ | セリ科 | キアゲハ |
| 47 ニホントウキ | セリ科 | キアゲハ |
| 48 ニンジン | セリ科 | キアゲハ |
| 49 バセリ | セリ科 | キアゲハ |
| 50 スイバ | タデ科 | ベニシジミ |

| 種名 | 科名 | 食草とする蝶 |
|----------------|----------|-----------------------|
| 51 ヒメスイバ | タデ科 | ベニシジミ |
| 52 アセビ | ツツジ科 | コツバメ |
| 53 ツツジ | ツツジ科 | |
| 54 トチノキ | トチノキ科 | スギタニルリシジミ |
| 55 オランダミミナグサ | ナデシコ科 | |
| 56 エノキ | ニレ科 | オオムラサキ ゴマダラチョウ テングチョウ |
| 57 ケヤキ | ニレ科 | |
| 58 モミジイチゴ | バラ科 | |
| 59 ヤマザクラ | バラ科 | メスアカミドリシジミ |
| 60 ギョボク | フウチョウソウ科 | ツマベニチョウ |
| 61 セイヨウフウチョウソウ | フウチョウソウ科 | モンシロチョウ |
| 62 アカガシ | ブナ科 | キリシマミドリシジミ ヒサマツミドリシジミ |
| 63 アベマキ | ブナ科 | ウラナミアカシジミ |
| 64 アラカシ | ブナ科 | ムラサキシジミ |
| 65 イチイガシ | ブナ科 | ムラサキシジミ |
| 66 ウバメガシ | ブナ科 | ルーミスシジミ |
| 67 ウラジロガシ | ブナ科 | キリシマミドリシジミ ヒサマツミドリシジミ |
| 68 カシワ | ブナ科 | ハヤシミドリシジミ |
| 69 クヌギ | ブナ科 | ハヤシミドリシジミ |
| 70 コナラ | ブナ科 | アカシジミ |
| 71 シラカシ | ブナ科 | |
| 72 スダジイ | ブナ科 | |
| 73 ピンオーク | ブナ科 | |
| 74 マテバシイ | ブナ科 | ムラサキツバメ |
| 75 ミズナラ | ブナ科 | アイノミドリシジミ |
| 76 ウマゴヤシ | マメ科 | モンキチョウ |
| 77 カラスノエンドウ | マメ科 | ルリシジミ ツバメシジミ |
| 78 カワラケツメイ | マメ科 | ツマグロキチョウ |
| 79 クズ | マメ科 | ウラギンシジミ コミスジ |
| 80 コマツナギ | マメ科 | ミヤマシジミ コミスジ |
| 81 シロツメクサ | マメ科 | モンキチョウ |
| 82 ネムノキ | マメ科 | キチョウ |
| 83 ミヤコグサ | マメ科 | シルビアシジミ |
| 84 レンゲ | マメ科 | |
| 85 マンサク | マンサク科 | ウラクロシジミ |
| 86 カラスザンショウ | ミカン科 | モンキアゲハ カラスアゲハ他 |
| 87 カラタチ | ミカン科 | クロアゲハ ナミアゲハ他 |
| 88 キハダ | ミカン科 | ミヤマカラスアゲハ |
| 89 コクサギ | ミカン科 | オナガアゲハ カラスアゲハ |
| 90 ゴシュユ | ミカン科 | オナガアゲハ ナミアゲハ他 |
| 91 サンショウ | ミカン科 | オナガアゲハ ナミアゲハ他 |
| 92 フュザンショウ | ミカン科 | オナガアゲハ ナミアゲハ他 |
| 93 ミヤマシキミ | ミカン科 | ミヤマカラスアゲハ |
| 94 ユズ | ミカン科 | ナミアゲハ クロアゲハ |
| 95 イボタノキ | モクセイ科 | ウラゴマダラシジミ |
| 96 マルバアオダモ | モクセイ科 | ウラキンシジミ チョウセンアカシジミ |
| 97 ウシリュウヤナギ | ヤナギ科 | コムラサキ |
| 98 カワヤナギ | ヤナギ科 | コムラサキ |
| 99 カタクリ | ユリ科 | |
| 100 サルトリイバラ | ユリ科 | ルリタテハ |



科学教室「富士山の自然」の下見



「春のめざめ、チョウたちの世界」展の準備をするメンバー

あとがき

平成5年3月25日から30日、遠鉄百貨店において「春のめざめ、チョウたちの世界」展を行うにあたって、私たちは、まずビニルハウスをつくることから始めました。子供たちが身近な春に接する前に、その自然観察の入門を伝えたいと考えたからです。そして、チョウの世界に親しむためには食草の栽培が不可欠です。今まで散在していた鉢植えもここに集めました。改めて確認すると、100種を数えることができました。これは、数年前から行っている木の実を育てる活動の成果でもあります。

普段、私たちはフィールドでチョウの生態・分布、植物学、さらには地史学について学んでいます。20番目のドングリを求めて、行動範囲が本州各地に及んだこともありました。子供たちが身近に触れる自然についての資料がありにも少なく、私たち自らが体験しておかないと、子供たちが自然に親しむきっかけを与えることはできません。このような使命感だけでなく、自然のもつすばらしさや奥深さは、私たちに「科学」の追究意欲をもり立ててくれます。この意欲がメンバー一人一人を結びつけていると自負しています。

これまでの取り組みの中間的なまとめを、この小冊子に表しました。これが、子供たちの自然観察の目を育てる一助になることを願ってやみません。そして、より深く、生命について、地球について、いっしょに考えていきましょう。

